

[37] バレエにとって“古典は母”

～ 母の日に因んで ベジヤール と フォーサイヌ ～

1996年5月10日 東京新聞 夕刊

この春日本を訪れたバレエのなかで注目すべきものといえば、やはりフォーサイヌとベジヤールだろう。広くダンスということなら、ピナ・バウシュも興味深かったが、いわゆるバレエではない。近年はバレエといっても、「これが？」と好みの古いファンが首をひねるような大胆を試みがいっぱいで、その点ではフォーサイヌもベジヤールもまず筆頭に来るような舞踊作家だが、しかし自分のメソッドをクラシック・バレエの延長線上に置いているという意味では正統的なバレエである。

舞踊は総合芸術だから、すぐれた振付家は音楽・美術・文学など芸術全般について深い思索を重ねていることが多く、インタビューや対談の記事で感心させられることが少なくない。近いところでは、ある音楽雑誌でフォーサイヌと宮本亜門が対談しているのが、ちょっとおもしろかった。バランシンについて語りながらフォーサイヌが「彼の作品は母のオーラ、美徳のオーラを発散している」と言ったのだ。バランシンというのは、若いころディアギレフのバレエ・リュッスにいた振付家で、後にアメリカでニューヨーク・シティ・バレエの基礎を作った人である。音符がそのまま身体の動きになったような知

[37] バレエにとって“古典は母”

～ 母の日に因んで ペジヤール と フォーサイヌ ～

1996年5月10日 東京新聞 夕刊

性的な振付をして、二十世紀のアブストラクト・バレエの創始者ともいわれている。フォーサイヌは、そのバランシンの背後に盲目的な信仰のようなものとして十九世紀のクラシック・バレエが存在していることを指摘したのだが、しかしおもしろいのはそこではない。続けて宮本氏が「では、あなたのバレエは？」とたずねたのに対して、

「失われた母のオーラでしょうね」

「フォーサイヌさんのお母さまは……」

「健在です」

何ともまあ、フォーサイヌらしい言いようではないかと、読みながら一人で笑ってしまった。

母ということ言うなら、ペジヤールにとっても思いは深いはずだ。彼が母を失ったのは、まだ七歳の時。非常に若く美しい婦人としてだけ記憶している母の死を、四十年以上たってもまだ受け入れていないと、彼は自伝で言う。母が彼のバレエに出てきて、彼は舞台上で母に会っているのだ、と。

こんなことを書いたからといって、べつだん私は舞踊作家のプライバシーに興味を持っているわけではない。彼らと母との関係が、彼らのバレエ作品のありようをじっぴに端的に示していると感嘆している

[37] バレエにとって“古典は母”

～ 母の日に因んで ベジヤール と フォーサイヌ ～

1996年5月10日 東京新聞 夕刊

だけなのである。

伝統ある芸術はどれもそうだが、バレエもまたテクニクの面で非常に厳しい修練を必要とする。それにまた長い歴史をつうじて表現の様式や作品の形式がしっかりと出来上がっていて、そのレールをはずれたかたちで作品を創ったり、自分を表現したりすることがとてもむずかしい。クラシック・バレエ畑の人間の頭の固さには呆れることがあるけれども、それも理由のないことではないのだ。

しかし自分なりの一步を踏み出そうと思ったら、教え込まれたとおりをやっても埒があかない。すでに世の中にあるものをもう一度作ってみても意味はないのである。そこで独創的な作家たちにとっては、頭と体に叩き込まれたものをいかにして突き崩すか、それが一大問題となる。

ベジヤールもフォーサイヌもクラシック・バレエの技法を土台にしている人だが、それを自分の作品のなかに取り込む方法が少し違っている。ベジヤールは古典への憧れのようなものを多大に持っているが、若い頃小さなバレエ団を転々として、職業的ダンサーとして確立する前に自分のグループを持ってしまった。古い伝統を持つバレエ団が林立している

[37] バレエにとって“古典は母”

～ 母の日に因んで ベジヤール と フォーサイヌ ～

1996年5月10日 東京新聞 夕刊

ヨーロッパで、いわば裸一貫でなぐりこみをかけた鬼才という印象がある。一見してクラシックの気取った美意識を挑発するようなスキャンダラスな作品を発表して注目を引いたが、にもかかわらずその表現の官能的な叙情性はクラシックを煮詰めたような味わいを持っている。四月に日本で上演された『愛が私に語りかけるもの』は過去の自作の名場面を集めたものだが、ベジヤールなればこそその臆面おくめんもない古典への耽溺たんできを見たのは私一人だろうか。

いっぽうフォーサイヌは、七〇年代のアメリカのクラシックやモダン、ポップなどさまざまな舞踊メソッドを貪欲に吸収したのち、名門シュツトガルト・バレエ団に入ってソリストとして舞台に立った経験を持つ。見るからに舞踏的な知能指数の高い人という感じで、彼の振付の眼がまわるような切れの良さや、捻挫ねんざしそうなテクニクは、自身クラシックをよほど踊れる人でなければどうして考えつくことは不可能だろう。それでいてフォーサイヌの作品には、いわゆる古典バレエの情感はまったくと違っていいほど感じられない。フォーサイヌの関心はもっぱら古典のテクニクをいかに変容・発展させることが可能かという点にかかっているようだ。今回の日本公演の『エイドス…テロス 形相と目的』も、

[37] バレエにとって“古典は母”

～ 母の日に因んで ベジヤール と フォーサイヌ ～

1996年5月10日 東京新聞 夕刊

その題名は「眼に見えるもの・目的としているもの」といった意味のギリシャ語で、まさにその間題意識が動きのなかで火花を散らしている舞台だった。しかしだからこそ、彼のバレエは時として息苦しいほどに古典にがんじがらめになっていると感じさせることもある。思うさま情緒にひたっているベジヤールの解放感と、それは正伝対のものだ。

バレエにとって古典は母のようなものである。人が母から受けとるものは愛情と日常のしつけ。それをバレエに置き換えれば表現とテクニックになるだろう。

ところで舞踊においては表現は胸、テクニックは足腰というのが原則である。まるでそれを証明するように、ベジヤールの振付の個性は胸の動きにあり、フォーサイヌの特徴は足腰の使い方にある。

人は母なくしてはこの世に生まれない。しかしまた何らかの意味で母を失うことなしには自分を生きることができないということだろうか。